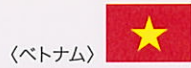


北海道YMCAの国際協力活動

メコンデルタの農村で幼稚園を造ろう!



(ベトナム)

すべての子ども達が、学校に通える事を願ってベトナム・メコンデルタ地域の農村に幼稚園を。



北海道YMCA 国際協力事業担当ディレクター 佐藤 雅一さん

「ベトナムボランティアワークの旅」について

北海道YMCAがベトナムで活動を始めたのは14年前になります。ベトナム戦争終結時に解散となっていたベトナムYMCAが復興し、新たな活動を始めたのを支援するためです。

初めての活動は、ベトナム戦争で夫を亡くし、自分の家を持っていない女性2名に新しい家を贈る活動でした。その活動のあいまに村の中を見て歩いた時、茅葺きの粗末な学校(教室)を見たことがきっかけとなり、翌年から小学校の教室造りを始め、近年は幼稚園の教室建設に変わって来ましたが、今日まで続けてきています。

教室建設は、地元の行政とベトナムYMCAが協議し場所と内容を決めます。建設資金は北海道YMCAが5,000ドル程度を提供し残りは地元が負担しています。一方的な支援ではなく、地域の人々が計画した事業を地元の行政・ベトナムYMCA・北海道YMCAの三者で協力して実施してきました。そのため、地元地域の関係者との信頼関係は厚く、最初の頃は町の中心部や幹線道路沿いでの建設でしたが、最近では中心から離れた地域や、貧困者のために新しく開発された地域での活動に変わってきています。

北海道YMCAが負担している建設費は、YMCAの会員を始め、多くの市民からお寄せいただいた募金によります。毎年9月から2月までをYMCA国際協力募金期間と定め、多くの方に募金に協力していただくと共に、バザー・街頭募金・集会での献金などのイベントを通じて集めています。

近年幼稚園の教室建設に変わってきた理由は、小学校に上がった子どもたちの途中退学者を減らす対策の

ひとつとして「乳幼児のケアおよび教育」への取組が重要視されてきているからです。従来、就学前の子どもへの対応は保健衛生の分野として扱われてきましたが、乳幼児への栄養補給・保健衛生プログラムと教育プログラムを組み合わせることで両者に高い効果が出るようになってきました。様々な調査から、乳幼児期に何らかの教育プログラムに参加した子どもたちは、就学率が高く、途中退学率が低く、学校の授業にも適応でき成績も良いという傾向が出ています。北海道YMCAが行っている教室建設が、近年幼稚園の教室になってきた背景には、上記のように小学校への準備と就学率・卒業率向上の期待が込められています。

YMCA英語スポーツ専門学校2年 山下 裕由

私が今年もボランティアワークに参加しようと思ったのは、昨年参加して日本ではできない経験を1週間弱という短い期間の中で、たくさん経験できたことにあります。昨年、ベトナムに行く時に非常に不安がありました。というのは、私は海外に行った事がなかったし、ベトナムの言葉を話すことができなかったからです。いざベトナムに着いた時にも、本当に作業をすることができるのか非常に不安でした。しかし、作業が一度始まるとボランティアワークに参加している日本人やベトナムのボランティアリーダーだけでなく、その地域の大人から子供までが自発的に一生懸命自分のできる作業をしてくれました。もちろん未経験の人ばかりですからどうすれば効率よく仕事をできるかわからず、困惑する場面もありましたがひとつひとつを身振り手振りで話し合いをしながら解決していきました。



そんな状況で作業をしてきたので、いつの間にか言葉なんか関係ないと思えるようになりました。作業の終わりがけに、一人のベトナム人の青年に妹を紹介するからベトナムに住んでくれとまで言われる仲になりました。

私は、去年ベトナムに行ったことで国際的な問題について真剣に考えるようになり、現在特にフェアトレードに関心があります。先日大通公園で行われたフェアトレードフェスタには実行委員として参加させていただきました。なので今年は、ベトナムのフェアトレード製品にはどんなものがあるかなども調べてきたいと思っています。昨年は、一般参加・学生合わせて8人で少し寂しい感じでしたが、今年は15人にもなったということで賑やかな旅になりそうです。今年の目標は、大人数になったからといって一人でもこの貴重な経験を落とすことなく、帰国することです。

(8月17日、全員元気に帰国しました。)

留学生日記 さつぽる

バンラデシユの科学者、
ファルザナ・サベトさん

今、一番エキサイティングなことは?

「実験で思いがけない結果に出会うこと」そして「夜遅くまで研究し、働く日本人の姿」と答えてくれたのは、北海道大学環境科学院環境物質科学専攻、太田信廣教授のもとで光電子科学を研究している大学院生サベトさんです。ご主人は日本の国費留学生で同じ教授の元と一緒に研究生活を送っています。いつも一緒にいいですね。「そうでもないですよ。それに別の研究室なんです」と。

働いている女性はジーンズに上着姿です

大学構内で撮影した写真の衣裳は民族衣装の中でも普段着のサルワー・カミズSalwar Kamizです。「サリーShariはパーティーや結婚式などの特別な時に着るものです」その区別は街に出て働いている女性が着けているもので、家庭にいる女性や地方の女性はいつももっと長い丈のものを着ているのだそうです。

寒いとは聞いていましたが、あれほど寒いとは

昨年10月に札幌にやってきました。やがて迎えた冬の寒かったこと。「すぐに靴やコートを用意したので、その後は大丈夫でした」。「雪は初めて見ました。窓の外で降りしきる雪は綺麗です」と決して冬が嫌いになったわけではないそうです。

もうひとつ驚いたのは、日本の研究者たちが朝から夜遅くまで仕事をしていること。「日本では普通なんでしょうが」。



▲普段着? とてもきれいでした

札幌での生活は働く女性の生活そのもので、ウィークデイは簡単に調理できるように週末に料理の支度しておくそうです。「日本で外食するととても高いのであるべく自分で、作るようにしています」

時々大通公園に遊びに行くなど札幌の生活を楽しんでいます。



国籍/ Bangladesh
名前/ ファルザナ・サベトさん